

“[E]thereal Pigs”

——キーツの‘I stood tip-toe upon a little hill’における身体性*

“[E]thereal Pigs”:

Physicality in John Keats’s ‘I stood tip-toe upon a little hill’

後藤美映

Mie GOTOH

英語教育講座

(平成19年9月28日受理)

一皿の榛をありがとう。——毎日、二ペンスで、食後に一籠もらえるといいのだが。——もしも我々が一種の天上の豚になって、放し飼いにされたまま霊的な栗の実やどんぐりを自由に食べられるものなら。——それはただ、栗鼠になって榛を食べるといふことにほかならない。というのも、栗鼠は天上の豚であり、榛は一種の大天使のどんぐりでなくて何であろうか。¹

これは1818年2月3日に、ジョン・ハミルトン・レノルズに宛てて書かれたジョン・キーツの手紙の冒頭である。この手紙に描かれた「天上の豚」や「霊的な栗の実やどんぐり」は特異な語句として奇妙にも我々の注意を引く。

キーツとレノルズが手紙の語句にどのような意味を込めたかを厳密に理解しようとすれば、手紙のやりとりの経緯を調べることによってその意味を理解することができるであろう。²しかし一方で、レノルズへの手紙は、詩的創造性についてキーツが自説の多くを説いた場であり、キーツ自身の一種の詩的思考の鍛錬の場であったともいえ、これらの語句がキーツの創造性的一端を担う大きな意味を有している可能性がある。したがって、本稿ではこれらの手紙の語句を一つの重要な鍵として、キーツの詩的創造性について論ずる。

まず手紙の冒頭におけるキーツの喩えは、概略すれば、自分が共鳴する素晴らしい詩を日常的に読めるといふ理想の生活を、「天上の豚」が「天上の栗の実やどんぐり」を自由に食べられることであるとする。しかし、注目すべきは、「天上の豚」になって「天上のどんぐり」を食べることを、栗鼠になって榛を食べることと同義であるとキーツが述べる点である。すなわち、手紙の冒頭の一節において重要なことは、「ethereal」という詩的ヴィジョンが言及する形而上的、「霊的」状態と、“Pigs”という物質的、身体的現実との落差にもかかわらず、二つの状態が並列されるという奇妙な感覚である。さらに注目すべきことは、おそらく詩的創作行為の理想として描かれるであろう、超現実的なヴィジョンの受容を単なる現実的な食事の行為と同列に置くという、キーツの認識である。特に、食べるという行為に収斂される詩的創造性はキーツ独自の詩学を表明している。したがって本稿では、このような「豚」と食事に潜む身体性を、キーツの創造性の鍵として論じる。

I

「豚」と対照的に並列された“ethereal”という語句は、キーツの時代二つの意味を持っていた。元来、名詞のether（エーテル）は、一種の希薄な実体として、大気圏のさらに上層を覆っている物質を意味しており、その形容詞である“ethereal”は、「その物質に属した」という意味と、一般的に「天上の」という意味を担っていた。しかし1817年以降、キーツはこの語の意味を独自に発展させ、詩的創造性に関わる語として使用する。³この語はキーツによって特に、外的な事物、いわば自然の生の素材を、想像的なヴィジョンへと昇華させた状態をあらわすメタファーとして使用された。このように現実を想像力によって詩的ヴィジョンへと導くsublimation（昇華）の過程は、ロマン派の詩人たちによって一種の化学変化として喩えら

れることが多い。その際「天上の」詩的ヴィジョンを生み出す昇華とは、物質的現実を純化する高次への変化であり、脱物質化に力点が置かれる。

したがって、“ethereal Pigs”にみられる、依然として昇華されずに残る、「豚」という、卑俗な現実的物質性は、「天上の」ヴィジョンとは齟齬を来すことになる。この物質性はさらに、食べるという行為自体に存在する身体性と密接に結びつき、その物質性を増すことになる。興味深いことにキーツは詩的創造の行為を絶えず食べる、飲むといった消化に関わる行為によって説明している。例えば、1817年の11月22日のベイリー宛の手紙の中でキーツは、「葡萄酒」を「飲む」という身体的消化の行為を創造性に結びつけている。

それゆえ君が永久に幸せになるためには、地上で抱く最も天上的な思索の再消化と私ならいのだが、この天上の古い葡萄酒を飲むことだけでなく、知識を増やし、全てを知ることが必要なのである。

(*Letters*, I: 186)

ここにおいてキーツは、鮮烈な感覚的経験を追体験することを「飲む」、「再消化」という消化に関わる行為によって言い換えている。

食べ物を摂るための口は、詩のヴィジョンを発するための精神性の発露の場というよりも、食べるという身体的な場が直接創作の行為の場として機能するための器官となる。しかし、ロマン派の詩的ヴィジョンは、内省、あるいは消化に関連づけた言葉に言い換えれば、食べ物の完全な消化、または反芻といえるような過程を経た後の脱身体的なヴィジョンとして、「霊的」な状態を呈示すると考えられてきた。このことを考えると、消化の行為や過程を強調する点にキーツの特異な創造性を見出すことができる。

さらにいえば、キーツの詩的ヴィジョンの特徴は、消化の途中の、いわば未消化といえる過程で、突如身体性に帰着することである。あるいは、キーツの詩的ヴィジョンの核は、よく噛んで味わう旨味にあるというよりも、がぶりと飲み込む際の身体的な瞬時の衝撃が、即効性として呈示されることだともいえる。‘Ode on Melancholy’においても、「一粒の葡萄」は「口蓋」において「はじける」ことによって鮮烈な衝撃をもたらすが、消化されることはないのである。内省的な孤高のヴィジョンへと至らない詩において、このような反クライマックスともいえる身体的衝撃が、詩的効果としての驚きとなって表現されるといえる。

こうしたキーツの身体性に基づく創造性は、「趣味」(taste)という美学的趣味を表現する語ではなく、ハズリットが表現した「趣味」(“gusto”)という語によって表されるといえる。キーツ自身も「カメレオンのような詩人」の定義を述べる際、やはり、この“gusto”という語を用いて、詩人の性格に言及している。⁴ キーツに多大な影響を与えたと思われるこの語について、ハズリットは次のように述べている。

ミルトンには偉大な趣味が備わっている。彼は二度強打を浴びせる。主題に挑みかかり、主題を嘗め尽すのである。彼の想像力は想像力の対象となるものを二度味わう。彼が描くものに、描く言葉に固執するのである。⁵

ここにおいて「趣味」という語は、外界の事物に共感するという次元において機能する詩的創造性ではなく、いわば、五感の全てが触手のようになって対象物に襲いかかり、搾り取れる全てのを味わい尽くす、という強靱な食欲を体現している。またさらに、「強打」という語が物語るように、詩の主題について熟慮することを、「二度強打」という身体的な動きに喩えており、ミルトンの創造性における強烈さが身体性そのもので表現されている。

Tasteという美学的な趣味を表現した語が、18世紀以来、共和主義的な市民の規範として機能するための脱身体的な観念を表すとすると、同じく「趣味」と訳せるとしても、“gusto”では明らかに身体、特に食べるという身体的側面に焦点が置かれている。キーツやハズリットらにとって、偉大な詩人であったミルトンの詩的力が、主題となる事物とそれを描写する言語に執拗に「食らいつく」創造性によって理解される時、キーツの詩における食べる行為への執着は、このような身体的創造性を強調しようとする意図の表れだと考えられる。

大変興味深いことに、キーツが精読したミルトンの『失樂園』の第五巻には、まさに、「天使」と「人間」が共有する食事について語られる場面がある。

理性的存在であるおまえたちも、純粹に叡智的な存在であるわれわれも、体内に各々下級の働きをする感覚を持っている。それによって聞き、見、嗅ぎ、触り、味わっている。味わいながら、混ぜ合わせ、消化し、吸収し、肉体的なものを霊的なものへと変化させるのだ。⁶

この場面では、ラファエロとアダムとイブが共に食事を摂り、アダムが人間の食べ物では天使の口に合わないのではないかという危惧を抱くと、ラファエロが天使も人間も共に同じ食べ物を必要とすることを述べる。そして、詩的想像力の「昇華／消化」をなぞるかのように、食べたものが、「肉体的なものから霊的なものへと変化する」過程が言及されることになる。さらにラファエロは、やべて「人間も天使と共に食事をするときがくる」可能性を告げる。人間も天使と同じ食べ物を摂り、最終的には「天上の」状態を希求することに創造性の鍵が潜んでいるとしても、基底となるのは、「肉体を養うもの」(“corporal nutriments (496)”)である「豚」の食べる「どんぐり」なのである。

しかし、このように身体性を基盤とした詩的創造性は、完全に消化された詩的ヴィジョンに到達する前段階の、いわば、未消化と表現されうる状態でもあるといえる。したがって、詩は時として、未消化によって絶えず飢餓感をおぼえ、その飢餓感を癒すために食べるための対象である詩的イメージを過剰に描写するようにみえる可能性がある。しかし、一方でこうした創造性は、過剰を豊穡へと変容させるような、対象の持つ鮮烈な生命力を引き出す効果を持つ。

本稿では、これまで述べてきたキーツの詩的創造性について、『1817年詩集』の中の「小高い丘の上で」(‘I stood tip-toe upon a little hill’)を通して具体的に論じる。この詩は、キーツが詩人として名乗りを上げた詩であり、キーツがどのような創造性をもってして詩人としての自覚に目覚めたかを探るための最良のテキストとなる。この詩において、キーツの「天上の豚」の詩学が、詩的対象を「味わい尽くす」ための飢餓感と消化不良の身振りによって、いかに身体的詩的ヴィジョンを取り込むものであったかについて論じる。

II

まず、「小高い丘の上で」という詩は、早朝の緑の生い茂る丘をイメージの宝庫とみなし、様々に目にするものを詩的ヴィジョンとして呈示する詩である。

どんなに貪欲な目も動き回れるほど視界が開けており、
さまざまなものを見回すことができた。

……………

そこで私はすぐに輝く、乳白色の、やわらかい、バラ色の
豪奢な花束を摘み始めたのである。⁷

15行目においてイメージを求める目には、「最も貪欲な」という形容が与えられている。“greedy”の語源は、飢餓感(hunger)を持つことである。視覚的な知覚は、飢餓感に突き動かされているかのように表現されているという点で、食べる行為と詩的行為との結びつきを確認することができる。さらに、こうした飢えた視覚が捉えた詩の対象は、名詞、形容詞、副詞の過剰ともいえる装飾的積み重ねによって表現される。例えば29行目からの詩行には、「5月の花」と「ミツバチ」、その側にある「小川」、 「小川」を囲む「きんぐさり」と「草」、そしてその根本には「スマイレ」と「苔」、といったように、名詞が空間的に緻密に羅列されている。そうした名詞はさらに、「風雅な」(“tasteful”)という元来「食べる」行為を象徴する形容詞や、「青々とした」(“lush,”)「葉の茂った」(“leafy”)という豊穡さを象徴する形容詞によって装飾される。そうしたイメージの連鎖は、後の*Endymion*の詩作において使用される視覚的イメージの宝庫といえ、詩の後半部では、神話の枠組みにおけるイメージの連鎖が展開される。

連綿とつづくこのようなイメージの羅列はしかし、反芻し、内省し昇華されるという過程には置かれない。詩行の16行目から25行目における動詞に注目すると、“To peer about, ” “trace, ” “To picture out, ” “Guess”という一連の動詞によって、まわりを見渡し、地平線のかなたへと目をはしらせ、見えなくなる森の小道を思い描き、地平の裂け目や岩だなから、そこを流れる小川を思い浮かべるというように、詩の語り

手の動きは見ることから推測することへと移行する。そして、23行目以降において見られるように、推測は、熟慮や内省へとは導かれずに、“I gazed,” “felt” という、見て感じるという詩の冒頭の動作を反復することになる。そして25行目において最終的に「わたしの心は軽快であった」と歌われ、詩人は、瞑想や憂鬱さではなく、軽快さと陽気さとともに詩を織り上げることになる。

そうした詩人の詩作は、27行目において、「花束を摘み取り始めた」と歌われるように、詩的イメージを摘み取っていくことによって作り出されるといえる。ここにおいて摘み取られる“posey”とは、もともと「花束」と同時に「詩作品を集めたコレクション」という意味を表す。すなわち、詩作は、享楽を与えるさまざまな奢侈を所有し、消化する行為であることを表明しているといえる。

この過剰なイメージは、未消化を促すような瞬間的な味わいによって、瞬発的な躍動感をもって描写される。

ほんの一瞬、彼女の手に触れさせておくれ
 ほんの一瞬、彼女の吐息を耳にさせておくれ
 そして、彼女が去るとき、
 彼女の金色の髪の毛から彼女の美しい目をたびたびこちらに向けてくれ
 ますように。
 次には何が。 (103-106)

ここにおける“one moment”という語句の繰り返しは、詩的ビジョンの瞬間性を強調し、「次には何が」という詩句に象徴される詩的行為は、詩が十分な内省によってヴィジョンを呈示していくのではなく、詩人自身も「次には何が」と期待するような、瞬間的軽快さと矢継ぎ早な展開を特徴としている。さらに、ここに描かれる少女は、妖精にも似て、軽快さと官能的な姿とによって身体性を強調しているといえる。また、105行目の“turn”，106行目の“auburne”における不調和ともいえる押韻は、読むものに違和感を与えると同時に、内省的な思考の流れを中断させるような現実感を浮上させる。⁸

この現実感、次にくる詩行の流れの中で、さらに突如として持ち込まれる身体性によって強められることになる。

泉はおそらく嘆きの声をあげているのかもしれない。
 こんな美しい花の群れが瑞々しい根本から乱暴にむしり取られて
 子供の手によって無造作にまき散らされ
 路傍にうち捨てられたまま枯れてしまうことに。 (43-46)

急な展開と衝撃によって、身体性が持ち込まれる。その身体性とは生命力溢れる花が急にもぎ取られて「死ぬ」という現実感よりも、唐突に表現される「子供の手」という身体性によって生じ、詩に驚きを与えることになる。

また、78行目においては、われわれ読者の身体性をも喚起する。「もし、ほんの少し手を差し出せば、その瞬間には一匹の魚もいなくなるだろう」と歌われるとき、冷たい水に憩う魚にさしのべられる手は、読者の手であり、視覚描写の構図の中に、身体性が持ち込まれるとすることができる。

このように、この詩に歌われる、花々の咲き乱れる緑の丘は、詩的ヴィジョンの精神的反芻の場ではなく、飢餓感に突き動かされて口にするイメージの咀嚼に伴う身体的な動きや衝撃を表現する場であるといえる。

では、このような詩の身体性が最終的にはどのようなキーツの創造性と結びついてくるのかということが問題となってくる。キーツの初期の詩に表現された身体性を伴う詩的ヴィジョンは、言い換えれば、詩的対象である自然の知覚を内省によって昇華させた後に得られる詩人の内的ヴィジョンについての言及へとは至らないといえる。もの自体や言葉自体の物質性に比重がかかる、こうしたキーツの詩は、ハントからの影響を色濃く映すといわれ、未熟な、そして未消化な詩として認識されてきた。その理由の一端には、詩人というものは、自然の客観的対象を表現する段階から、詩人の内省的自己を映し出す段階へと至るべきであるという詩人の成長物語や、初期の未熟な詩人キーツがハントからの影響を抜け出て、オードや叙事詩へと向かったのであるという成熟の物語が依然としてキーツ詩評価の前提として存在しているからである。したがって、

キーツの初期の詩における、身体性を孕んだ詩的ヴィジョンには、未成熟であるという評価が下されてきた。しかし、このキーツの詩の身体性こそが、あるいは、「天上的」なヴィジョンを「豚」という身体性との遭遇における衝撃の中で垣間見る詩作こそが、キーツ詩の力であると評価できると考えられる。

キーツのメンターであったハントの文学的思考も、食べ物と密接に結びついていた。⁹そしてハントは、食べ物を享受する身体的快樂と、それを共有するための共同体における共感や社交性を詩に表現することを目指していた。すなわち、このようなハントの詩学は、集団性という社会性を、身体的快樂という、人間に共通する基盤に求め、それを歌い上げることの意義を問いかける。そうした詩作の態度は、自然に一人向かい、意図された詩の主題である詩人自身の自己を呈示する、ワーズワスの詩作に抵抗を示すともいえる。

キーツも同様に、「ワーズワスの、自己中心的崇高さ」に異を唱え、自己を持たない詩人が、“gusto”という詩的強さをもって詩作することを主張している。キーツの詩にみられる身体性のヴィジョンは、詩人自身の自己を最終的に詩に表現することを回避し、事物の身体的知覚にとどまる力であると考えられる。

ハズリットが、ワーズワスの『逍遙』を批判して次のように述べるとき、共同体的な詩作の抵抗の場は、やはり身体であったことが理解できる。

したがって、想像力を働かせている際、また求めて知的活動に専念する際、そして実際の善や悪には関わりたくない際に、精神が物事の観念のみに排他的に専心しているような職業の者や追究に従事する者は、道徳的感情や社会的情愛が温かくもわき上がるのを抑制するにちがいない。つまり、気づいてみれば、動物的機能を停止させ、身体的組織を弛緩させてしまって、冷淡で味も素っ気もない抽象へと至るに違いない。¹⁰

ハズリットは、ワーズワスが周りのすべての対象を自分自身を映す鏡となすことに対して、他の能力、特に身体的領域に働きかける力が失われ、冷淡で、乾いた抽象化へと詩が帰結してしまうことを述べている。

キーツの詩は、ハントやハズリットらに共鳴し、身体性にとどまることを強く表現しており、身体という人間すべてに存在する基盤を糧に歌う詩は、大衆に向けたリベラルな側面を打ち出すことができる。さらに、ニコラス・ローが言及したように、“ethereal Pigs”の「豚」を、エドマンド・バークが『フランス革命についての省察』において言及した、「豚のような群れ」と表現された大衆として捉えるとき、「天上の豚」という語句から、キーツ詩のリベラリズムを読み取ることも可能になる。¹¹ハントが、社交性と共同体に詩の創造性を求めたように、キーツの「小高い丘の上で」にも、集団のリベラルな関係性が示唆されている。

さざ波は、コショウ草にまで達し、
 緑色の草葉の中で自ら涼んで喜んでいるように思える。
 自らは涼む一方で、
 コショウ草の緑の住処が生き生きとするように瑞々しさとうるおいを与えている。
 そうして、偽りなく行動する立派な人間のように
 恩恵を与えあっているのである。(81-86)

この詩行においては、河と川辺の緑がいかに自然の潤いと新鮮さをともに分かち合い、共生しているかが描写されており、コックニー詩派の共同体から民衆の団結にまでいたる社会の集団性が浮き彫りにされる。また、そうした集団が、「作法」(manners)ではなく、「行動」(“behaviours”)によって結びつき、よりリベラルで、新しい集団として誕生することを描いているとも考えられる。

このように、キーツの「天上の豚」の詩学は、キーツが詩人として産声を上げた詩において明確に呈示され、身体性という詩作の場を足がかりにするものであったといえる。キーツが目指した理想の詩人である「カメレオンのような詩人」のカメレオンは、シェリーも詩の中で「カメレオンは光と空気を食べる」と歌うように、光と空気を食べる生き物と考えられていた。¹²しかし、キーツは「大天使のどんぐり」である光と空気だけでは生きられず、地上のどんぐりを食べようとしたと考えられるのである。

*本稿はイギリス・ロマン派学会第32回全国大会(2006年9月24日、於 鳥取大学)において「“ethereal

Pigs”—キーツの *Poems* (1817) における身体性」というタイトルにて発表した原稿を加筆・修正したものである。

註

1. John Keats, *The Letters of John Keats, 1814-1821*, ed. Hyder Edward Rollins, vol. 1 (Cambridge, MA: Harvard UP, 1958) 223. キーツの手紙からの引用は全てこの版に拠り、以下 *Letters* と略記し、引用の末尾に巻数とページ数を記す。
2. キーツのこの手紙が書かれた背景や、手紙に添えられた二篇の詩、「J. H. R.へ。彼のロビン・フッドのソネットへの返歌として」（この詩が発表された際には「ロビン・フッド、ある友に寄せて」というタイトル）や「人魚亭の詩」についての解釈は以下を参照。John Barnard, “Keats’s ‘Robin Hood,’ John Hamilton Reynolds, and the ‘Old Poets,’” *Robin Hood: An Anthology of Scholarship and Criticism*, ed. Stephen Knight (Cambridge: D. S. Brewer, 1999) 123-40; Thomas R. Mitchell, “Keats’s ‘Outlawry’ in ‘Robin Hood,’” *Studies in English Literature, 1500-1900*, 34 (1994): 753-69.
3. George Bornstein, “Keats’s Concept of the Ethereal,” *Keats-Shelley Journal* 18 (1969): 97-106.
4. “. . . It [the poetical Character] has no character – it enjoys light and shade; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated. . . .” (*Letters*, I: 387).
5. William Hazlitt, ‘On Gusto,’ *Romanticism: An Anthology*, ed. Duncan Wu, 2nd ed. (Oxford: Blackwell, 1998) 599.
6. John Milton, *The Complete Poetry of John Milton*, ed. John T. Shawcross (1963; New York: Anchor Books, 1971) 352.
7. John Keats, *The Poems of John Keats*, ed. Jack Stillinger (Cambridge MA: Harvard UP, 1978) 79-80. これ以後、キーツの詩の引用は全てこの版に拠り、引用の末尾に行数を記す。
8. William Keach, “Cockney Couplets: Keats and the Politics of Style,” *Studies in Romanticism* 25 (1986) 191.
9. Nicholas Roe, *Fiery Heart: The First Life of Leigh Hunt* (London: Pimlico, 2005) 22.
10. William Hazlitt, ‘Observations on Mr. Wordsworth’s Poem the *Excursion*,’ *The Complete Works of William Hazlitt in Twenty-One Volumes*, ed. P. P. Howe, vol. 4 (Bungay: Chaucer P, 1930) 117.
11. Nicholas Roe, *John Keats and the Culture of Dissent* (Oxford: Clarendon P, 1997) 156.
12. P. B. Shelley, *Shelley: Poetical Works*, ed. Thomas Hutchinson (1971; Oxford: Oxford UP, 1988) 579.